



「幕が上がる」

第9学年主任

いよいよ9年生の「夢源の翼」最終章の幕が上がります。義務教育学校の最終学年として、子どもたちだけでなく私たちも「自主協同」の学びの具現化が問われる1年となります。

これまで、7、8年と学年プロジェクトでは、テーマ「職業」を探究して、修学旅行でその学びを様々なかたちで発信・交流し、深化させることができました。さらなる交流や「ハローワーク」の完成も視野に入れながら、子どもたちは、修学旅行後、振り返りのレポートを書き、社会に出てから役に立つ学びとは何なのか、今、学校で何を学ぶべきなのかを改めて問い直し、考えました。その中で、これからの未来に、働く上で大切な力は「コミュニケーション能力」と「創造力」。この2つは特に重要になってくるのではないかという考えが多数ありました。

さて、9年生と言えば演劇です。子どもたちは、楽しみと不安の入り交じった気持ちで、自分たちが今年、どんな演劇を披露できるのか思いを馳せていることでしょう。今まで学年全員で取り組んできた学Pは、次に学級での演劇プロジェクトに移行します。学Pのように実行委員がリードやサポートするのではなく、一人一人に役割があり、それぞれ主体的な取り組みや創造性が求められます。各クラスの4役（監督・助監督・演出・脚本）がそれぞれの役割をつないでいきます。そして、これまで見てきた先輩の演劇や、各教科の学び、学Pでの学び、これまでの経験や知識を総動員して、自分たちで紐解いたものを新たに組み直し、新しい結びをみんなで創り上げていきます。学年の横の糸だけでなく、縦の糸をも組み直し、脈々と受け継がれている附属の演劇の伝統をつないでいくのです。そこでの新しい結びは、学年でひとつ。クラス対抗ではありません。そのため、学年で3つの演劇の舞台を創り上げるため、各クラスの連携や独自性が必要になります。そこには、クラスを超えた仲間同士のコミュニケーションが発生します。話し合いや合意形成が必要となるでしょう。お互いを理解しながら、協働で進めていくことが山ほど出てくるでしょう。ほうれんそう（報告・連絡・相談）なしでは、ことはスムーズに進みません。さらに、クラスの内外にたくさんの役割が出てくるので、それをまとめあげるマネジメント能力、さらに、トラブルに瞬時に対応する柔軟性も必要になってきます。と、考えていくと「演劇には、これからの時代に必要と言われている素養がほとんど全て入っているのではないか！」（というのは、平田オリザ氏の言葉なのですが。）このように、学Pの3年間の学びは演劇で完結するものではなく、これからの未来社会を創る力に変えていくことができるものなのです。

しかしながら、音ドラと同じように、演劇のおもしろさ、大変さ、本当の価値は実際にやった者にしかわからないのです。これまで何度か演劇に携わったことがある大人として演劇を行う意義を述べましたが、幕が下りた後の子どもたちの語る言葉にこそ、本当のこの学年の演劇の意味や価値があるのだと思っています。とにもかくにも、今年度の幕が上がります。乞うご期待。